

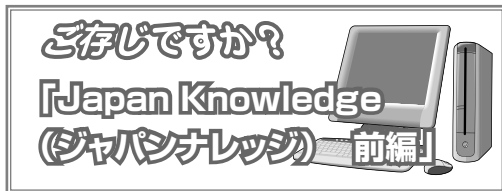
ドイツ文学わき道散歩(9)

当人たちにとって都合の悪い思想の持ち主を、「好ましくない」という表現のもとに国家的レベルで裁くことがある。哀しいかな、世界平和を希求する国々が増えた現在に至っても、そのような事態は後を絶たない。「言論の自由」を過剰に要求する風潮も考えものだが、自身と考え方の異なる人びとを受け入れることが出来ない社会は、文化を衰退させてしまうと云えよう。

文化の蹂躪者、と聞くと第二次世界大戦期のナチスドイツを連想する人も多いはずである。言わずと知れたナチの指導者、アドルフ・ヒトラーは、徹底した思想統制と反ユダヤ主義でヨーロッパ全土に恐怖の時代をもたらした。しかし、当初はこの政治家が国民や海外の政治家に熱狂的に支持されていたことをご存知だろうか。世界恐慌による混乱なども要因の一つだが、ヒトラーの掲げた理想に多くの国民は希望を見出していたのである。G.グラス作『ブリキの太鼓』で主人公の父が黨員として熱狂的なヒトラー崇拜を行った場面は、1959年の発表当時には苦々しい笑いを含み、現在の我々には異様な雰囲気として捉えられるが、初期ナチ時代の紛れもない風景である。

民族性や郷土性を強調した文学を文化政策と称してナチの宣伝に利用し、国民の心を掴んだヒトラーが、民族的テーマを好むヴァグナーの楽曲を偏愛したことはよく知られている。そのためヴァグナーの楽劇は戦後暫く各国で上演を禁じられ、今もなおパプロフの犬ではないが、彼の作品を見聞きするとハーケンクロイツ(ナチの鍵十字)を連想し、ぞっとするという人がいることもまた事実なのである。この様なナチスとの関わりは20世紀ドイツ文学の台風の目ののだが、この話はまた後日、改めてお話することとしよう。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり



皆さんは今年の4月から新たに接続した外部データベースである「Japan Knowledge (ジャパナレッジ)」をもうご利用になられましたか? 「ジャパナレッジ」はネットアドバンス社が提供する日本有数の辞書・事典を中心に構築されたデータベースであり、今までご紹介してきた「J-BISC」や「雑誌記事索引ファイル」とは趣を異にしたデータベースです。今回は次号と2回に分けてこの「ジャパナレッジ」を紹介したいと思います。

「ジャパナレッジ」を構成しているのは「日本大百科全書」、「Encyclopedia of Japan」といった有名な百科事典、「ランダムハウス英和大辞典」などの著名な辞書を中心にコンテ

ンツが形成されていて、総収録項目数は約113万件にのぼります。ですので知りたい単語、事項などを容易に検索することができます。今まで本学図書館で提供してきたデータベースは図書情報、論文情報が中心のものでしたが、このデータベースは辞書代わりの役割を果たしてくれるものなのです。自分の調べたい言葉を入力し「辞事典の検索」ボタンをクリックすれば、容易に意味などを調べる事ができますし、「記事の検索」、「URLの検索」等のボタンをクリックすればその事項の関連記事、関連URLも検索する事ができます。さらにこの「ジャパナレッジ」にはこれら検索コンテンツ以外に、コラムやマルチメディアコンテンツも充実しています。次号ではこれら「ジャパナレッジ」特有のコンテンツについて紹介したいと思います。

(機械化推進委員会委員長 宮杉 浩)